

語彙的アスペクトから見る「とき節」の解釈

近森藍璃

1. 導入

日本語の「とき節」は主節と従属節の表す出来事が同時・前後関係を伴って生じることが知られている (Kaufmann and Miyachi (2011), Oshima (2011))。

- (1) ケンは京都にいるとき、先生と会った。 (Kaufmann and Miyachi (2011: 43))
- (2) 家を出るとき、忘れ物に気が付いた。 (Oshima (2011: 5))
- (3) ひろしはワイングラスに口をつけたとき、何かつぶやいた。 (ibid.: 6)

上記の例(1)では、主節と従属節の出来事が同時に起こると解釈される。しかし、(2), (3)のような例の場合には、その従属節の時制により出来事が起こる順番が前後の解釈が観察される。本論は日本語の「とき節」における3つの時間解釈への説明付けを試みる。

2. 先行研究

Oshima は連結子「とき」が3つの意味を持つと主張している。具体的には、文に1つでも状態動詞があれば連結子は同時を、両方の節が非状態動詞を伴っていれば連結子は前後を意味すると仮定し、次のような例文の解釈を説明している。

- (4) 電車に乗っているとき、後ろから押されて転んだ。 (Adapted from Oshima (2011: 20))
- (5) ヒロシは家を出るとき、忘れ物に気付くだろう。 (ibid.: 26)
- (6) ヒロシはワイングラスに口を付けたとき、何かつぶやいた。 (ibid.)

しかし、Oshima の提案は(7)の文が生じさせる同時の解釈を導出することができないという点が問題になる。

- (7) トムは泣いたとき、サングラスを使った。

3. データ

本論では先行研究が状態動詞・非状態動詞の分類でのみしかとき節を扱っていないことに着目し、非状態動詞・状態動詞の二項対立ではなく、この非状態動詞をより詳細に分析することで、とき節が生じさせる解釈を再確認した。具体的には、Vendler(1967)の4種類の語彙アスペクトのうち、動的なアスペクト(活動動詞、達成動詞、到達動詞)を示す動詞の組み合わせで作例し、インフォーマント調査を通してとき節の解釈を観察した。以下は最終的に得られた解釈をまとめた図である。

	語彙的アスペクト	時制	得られた解釈
とき節	活動動詞	る	前、同時
		た	後、同時
	達成動詞	る	前、同時
		た	後
	到達動詞	る	前
		た	後

4. 提案

以上のデータ観察に基づいて、本論では語彙アスペクト、語彙アスペクトが「一る/た」と組み合わせさせた場合の解釈を提案した。本論ではPustejovsky(1991)の用語を用いて、動的な語彙アスペクトの特徴を示している。[+process]というのはある一定の長さの出来事を示し、[+transition]というのは、論理的頂点や変化を表す。

- (8) a. 活動動詞 [+process]
- b. 達成動詞 [+process][+transition]
- c. 到達動詞 [+transition]

時制とそれぞれ語彙アスペクトが結びついたとき、その解釈は次のようになる。

- (9) 「とき節」内での アスペクトとテンスの相互作用
- ①ー・ー：イベントが進行中である、過程である

- ②・ー：インターバルの始点、起動相的
- ③ー・：インターバルの終点、完結、完了相的
- 活動動詞とテンス：(ー・ー：る /た)(・ー：る)(ー・：た)
- 達成動詞とテンス：(ー・ー　る)　(・ー：る)(ー・：た)
- 到達動詞とテンス：(・ー：る)(ー・：た)

最後に、主節ととき節の出来事の順序決定について以下のように仮定する。

(10) 出来事順序決定

- a. 出来事の始点（起動相）を示す述語（・ー）をとき節が有している場合、とき節はその出来事を主節の出来事に後続させる。
- b. 出来事の終点（完了段階）を示す述語（ー・）をとき節が有している場合、とき節はその出来事を主節の出来事に先行させる。
- c. とき節内の述語が進行を示す（ー・ー）の場合、その出来事は主節の出来事を包含する。

このように、本論では語彙アスペクトと時制が結びついた述語によって主節ととき節の出来事の順序決定がされると提案する。

5. 分析

最後に、ここでは本論の分析を一つ概観する。以下では先行研究の節で問題となっていた(7)（以下では(11)として再掲する）を分析する。

(11) トムは泣いたとき、サングラスを使った。

この文は Oshima の予測通り直後（トムは泣いた（直）後、サングラスを使った。）の解釈が生じるだけでなく、同時の解釈も観察される例であった。この2通りの解釈が生じる理由を本提案を用いて説明する。

まず、この文においてとき節内の動詞は活動動詞であり、時制は「一た」になっている。(9)から、活動動詞と「一た」が結びついた場合は(9)①の解釈と、③の解釈が得られる。そして(10)の(b),(c)より、とき節の出来事が主節の出来事に先行するという順序関係と、とき節の出来事と主節の出来事の包含関係（同時）が成立する。このことから、(11)が前後だけでなく、同時の解釈も生じさせることが得られる。

6. 結論

本論では、とき節の解釈は状態動詞か非状態動詞かによって決定されるという多くの先行研究が取る立場では説明できない例から、とき節の解釈には語彙アスペクトと時制の組み合わせが重要であると仮定を立てデータをまとめた。またそのデータから提案をし、とき節の示すさまざまな解釈に対して説明を与えることを試みた。

参考文献

- Chomsky, Noam (1995) *The Minimalist Program*, MIT Press, Cambridge, MA. / Demirdache, Hamida and Myriam Uribe-Etxebarria (2004) “The Syntax of Time Adverbs,” *The Syntax of Time*, 143-180, MIT Press, Cambridge, MA. / Demirdache, Hamida and Myriam Uribe-Etxebarria (2007) “The Syntax of Time Arguments,” *Lingua* 117, 330-366. / Demirdache, Hamida and Myriam Uribe-Etxebarria (2008) “Economy Constraints on Temporal Subordination,” *Recent Advances in the Syntax and Semantics of Tense, Aspect and Modality*, ed. by Louis de Saussure, Jacques Moeschler and Genoveva Puskás, 169-192, De Gruyter Mouton, Berlin. / Demirdache, Hamida and Myriam Uribe-Etxebarria (2014) “Aspect and Temporal Anaphora,” *Natural Language and Linguistics Theory* 32, 855-895. / Kaufmann, Stefan and Misa Miyachi (2011) “On the Temporal Interpretation of Japanese Temporal Clauses”, *Journal of East Asian Linguistics* 20, 33-76. / Kusumoto, Kiyomi (1999) *Tense in Embedded Contexts*, University of Massachusetts Amherst. / Ogiwara, Toshiyuki (1996) *Tense, Attitudes, and Scope*, Kluwer Academic Publishers, Dordrecht. / Oshima, David Y. (2011) “On the Interpretation of Toki-clauses: Beyond the Absolute/Relative Dichotomy”, *Journal of East Asian Linguistics* 20, 1-31. / Pustejovsky, James (1991) “The Syntax of Event Structure,” *Cognition* 41, 47-81. / Reichenbach, Hans (1947) “The Tenses of Verbs”, *Elements of Symbolic Logic* 51, 287- 298, Macmillan. [Reprinted in Free Press, 1966.] / Vendler, Zeno (1967) *Linguistics in Philosophy*, Cornell University Press, Ithaca. / Kudo, Mayumi (1995) *Tensu Asupekuto Taikei to Tekusuto* (Text and System of Tense and Aspect), Hitsujishobo, Tokyo. / Mihara, Kenichi (2004) *Asupekuto Kaishaku to Togo Gensho* (Aspectual interpretation and Syntactic phenomena), Shohakusha, Tokyo.